

東北地方太平洋沖地震 東日本大震災 —記録・検証—

新しい防災まちづくりのために

平成24年3月
松島町



追悼式辞

平成 23 年 3 月 11 日、午後 2 時 46 分、突然、これまで経験したことのない大きな揺れとともに、その時がやってきました。

海から襲った最大 20 メートルを超える真っ黒な大津波が皆様を一瞬にして飲み込みました。

突然、最愛のご家族とも引き裂かれ、家族への愛、これからの夢、その無念さはいかばかりだったでしょう。

津波が襲った瞬間も、最後まで生きようとした思いが叶わず、家族への愛情が、一瞬にして無情にも打ち砕かれた心中はいかばかりかとお察し申し上げます。

あの東日本大震災発生から一年を迎え、追悼式典を挙げるにあたり、本来であれば、一周忌を迎え、大変お忙しい中、ご参列いただきましたご遺族皆様に対し、衷心より哀悼の意を表し、亡くなられた方々に対し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

また、被災にあわれたすべての町民の皆様に、心からお見舞い申し上げます。

当日の天候はくもり、最高気温は 3.9℃、最低気温はマイナス 4.5℃と寒さを感じる日、松島町で観測した震度は震度 6 弱、気象台が発表したマグニチュードは 9.0、最大震度は栗原の震度 7 でありました。

防災行政無線が鳴り響く中、その後の余震とこれから起こるであろう大津波の恐怖から命を守るため、町民の多くの方が近くの高台や避難所・ホテル・お寺・神社などの高台に避難しました。

130 キロ沖の太平洋からはじき出された大津波が、太平洋沿岸をのみ込んだニュース映像は、私たちの津波に対する概念をはるかに超えるものでした。

時間の経過とともに、その概要が徐々にあきらかにされました。

死者行方不明者あわせて 2 万人近くの方が犠牲となり、これまでの災害をはるかにしのぐ悲惨な状況を生みました。

本町においても 21 名の尊い命が大災害の犠牲となりました。

一瞬にして多くの命と財産をのみ込んだ東日本大震災は、私達にこの歴史の生き証人として、災害に対する心構えと、尊い命を守るすべを後世に伝えなければならない、と心に刻ませることになりました。

本町の被害を申し上げますと、今回の激震により地盤沈下が沿岸部で、最大 1 メートル 50 センチ、平均で 70 センチ沈下し、今も海水が浸水する被害に苦しめられ、復興の妨げになっている状況です。

震災直後から、電話、電気、水道等すべてのライフラインが遮断され、特に給水活動につきましては、町内水道事業者皆様方の団結した復旧作業と県外からも給水車並びに人員の支援をいただき住民の皆様にご給水活動を行いました。

自衛隊の方々や消防団員のご支援のもと、震災発生から4月16日まで約一ヶ月間の長きにわたり、ご協力いただき、住民の大切な命の源ともいえる水を供給していただきました。

このほかにも、崖崩れなどにより生活道路にも影響を受け、居住する建物をも危険にさらすなど住民の生活に大きな不安と厳しい現実をつきつけました。

これらの復旧には、自衛隊の方々や災害防止協議会による復旧作業により、幹線道路の応急復旧作業が昼夜を問わず実施されました。

また、この災害は、一瞬の揺れと津波により人命を奪っただけでなく、約20数年分の震災廃棄物を残しました。

震災廃棄物仮置き場の受け入れ並びに、運搬業務を岡山県の岡山市と倉敷市にご支援いただき、特に倉敷市につきましては、支援期間を一ヶ月間延長していただきました。

後日、この支援活動は多くの町民の感謝のメールとなって倉敷市に寄せられたことを伊東市長から報告を受け、町民の支援に対する感謝の気持ちが直接伝えられたのだと大変うれしく思っております。

避難につきましては、最大45カ所の避難所に、3,719の方が避難生活を余儀なくされました。

避難所においては、にかほ市を始めとして、多くの医療チーム並びに県内外からのボランティアのご支援、そして町内の方々による炊き出し活動など、多くのご支援がありました。

また、この震災時に松島を訪れていた1,200人あまりの観光客の方が誰一人、けがすることなく無事にご帰宅いただけたことは、観光協会をはじめとする観光関係者お一人お一人のご努力のたまものと深く感謝申し上げます。

このたびの東日本大震災は、命の尊さと支え合う大切さ、またたくさんの支援の輪、そして人と人との未来に向かって乗り越える心の絆の大切さを強く感じさせられました。

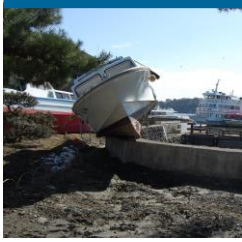
私たちは今回の教訓をしっかりと受け止め、これからの復興に全力を尽くしますことを、震災で亡くなられたすべての方にお誓い申し上げます。

最後になりますが、本日までご出席いただきましたすべての皆様に感謝とさらなる復興へのご協力をお願いし、追悼の式辞といたします。

平成24年3月11日

松島町長 大橋健男

東日本大震災を検証する①



平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の地震による揺れと 3.8m の津波が沿岸地域に來襲しました。

この震災は、本町の各所に甚大な被害をもたらすとともに、今後の防災対策のあり方やまちづくりに対する課題と教訓を与えました。さらに平成 23 年 4 月 7 日に発生した余震では被害が拡大しました。

今回の震災の経験を踏まえて、私たちは、これまでの「地震対策」の有効性を検証し、今後の防災のあり方を検討していく必要があります。

そのためには震災とその被害の実態を把握し、未曾有の災害に対して住民や組織がどのように動き、対処したかを検証する必要があります。

ここに示すのは、東日本大震災における松島町の被害状況等、そして松島町の人々の証言を集めたものです。わたしたちはこれらの事実を記憶にとどめるだけでなく、将来の松島町と、ここに住む人々の暮らしの教訓として、後世に伝えていかなければなりません。



東日本大震災における松島町の被害状況等 - 平成 24 年 1 月 13 日現在

概要

- (1) 発生日時 平成 23 年 3 月 11 日 (金) 14 時 46 分
- (2) 震央地名 三陸沖 (北緯 38.0 度, 東経 143.9 度 牡鹿半島の東約 130km)
- (3) 震源の深さ 約 24km
- (4) 規模 マグニチュード 9.0 (観測史上最大)
松島町: 震度 6 弱 (宮城県の最大: 栗原市 震度 7)
- (5) 津波発生 津波の高さ 3.2m (16 時 13 分 松島町第 1 波到達)
津波の高さ 3.8m (16 時 40 分 松島町第 2 波到達)

被災状況

- (1) 概況 店舗や住宅への浸水及び全半壊、ブロック塀の倒壊、外壁の崩落、崖崩れ、道路の亀裂等。
- (2) 津波による浸水面積 2km² (国土地理院計測・概略値)
- (3) 家屋等被害 全壊: 219 戸 (調査継続中)
大規模半壊: 351 戸 (調査継続中)
半壊: 1,216 戸 (調査継続中)
一部損壊: 1,496 戸 (調査継続中)
※上記のうち
床上浸水: 191 戸 (調査継続中)
床下浸水: 88 戸 (調査継続中)
- (4) 人的被害 町民で亡くなった方: 21 人 (町内で 3 人、町外で 18 人)
行方不明者: 0 人
重傷者: 3 人
軽傷者: 34 人

避難所・避難者数

- | | | |
|--|-------------|-------|
| | ピーク時(3月12日) | 12月9日 |
| (1) 避難所数 | 45 箇所 | 0 箇所 |
| (2) 避難者数 | 3,719 人 | 0 人 |
| (3) 他自治体からの避難者の受入 (東松島市) | | |
| 東松島市の避難者受け入れについては、8月21日の避難者退所により、町内の避難所はすべて閉所となった。 | | |

被害状況は以下のとおりであるが、調査は継続中であり今後増える見込みである。

(1) 公共土木施設

- 町 道：197 箇所、L = 25.7km（亀裂、沈下等）
- 漁 港：3 漁港（古浦、名籠、銭神：護岸・物揚場エプロン・防波堤等の沈下、亀裂）
- 河 川：1 河川（幡谷後沢川：亀裂、破壊）
- 橋 梁：42 箇所（橋台、橋脚亀裂、舗装段差等）
- 公 園：1 箇所（松島運動公園：園路損傷、施設内設備損傷）

(2) 農業用施設

- 農 道：21 箇所（亀裂、沈下、法面・路肩崩壊等）
- 用排水路：44 箇所（排水路・護岸ブロックの破損等）
- た め 池：34 箇所（堤体沈下・亀裂、法崩れ等）
- 排水機場等：29 箇所（機場周辺の沈下・地割、引込柱・操作盤の傾き等）

(3) 農業共同施設 8 箇所（地盤沈下、温室ハウス等破損）

(4) 農 地 1 箇所（農地亀裂、暗渠破損） 海水浸水 63.4ha

(5) 上水道施設 取水施設 1 箇所、浄水施設 1 箇所、給配水施設等 252 箇所

(6) 下水道施設 管路 L = 2.3km、マンホール 173 箇所、マンホールポンプ 1 箇所、
雨水路 L = 0.1km、雨水ポンプ場 5 箇所、浄化センター1 箇所、
汚水中継ポンプ場 1 箇所

(7) 学校教育施設 5 箇所（校舎・体育館・プール・校庭等損傷）

(8) 社会教育施設 9 箇所（公民館・市民の森・町民体育館・海洋センター等損傷）

(9) 文化財施設 国指定 6 箇所、県指定 3 箇所、町指定 13 箇所

(10) 福祉施設 4 箇所（保育所・健康館・保健福祉センター・老人ふれあいの家の損傷）

(11) 観光施設 11 箇所（建物屋根・天井破損、橋脚破損、便所破損、舗装損傷等）

(12) 商工施設等 建物損壊等 245 店舗（利府松島商工会松島事務所調べ）

(13) 水産施設等 カキ養殖棚 700 台、漁船 152 隻、共同カキ処理場 6 箇所
（宮城県漁業協同組合松島支所調べ）

(14) その他施設 庁舎等の損傷



(1) 電 気 町内全域で停電し、3月18日町内全域で通電したが、4月7日の余震により停電し、4月9日町内全域で通電。

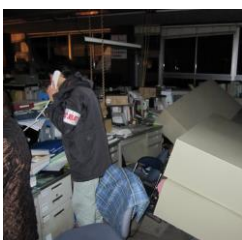
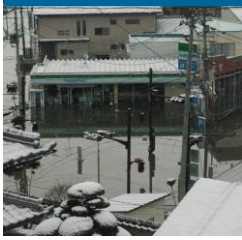
(2) 上 水 道 広域水道が供給停止となり町内ほぼ全域で断水したが、二子屋浄水場の運転再開、3月20日大崎広域水道の受水、3月31日仙南仙塩広域水道の受水により、4月3日町内のほぼ全域で水道が復旧した。

4月7日余震により大崎広域水道が供給停止となり、高城行政区、磯崎行政区の高位部などで断水となったが、4月10日受水開始、復旧した。また、仙南仙塩広域水道が利府町内の漏水工事のため4月12日から14日まで供給停止となり、松島行政区で給水制限及び断水となったが、4月15日広域水道から受水、4月16日より復旧した。

(3) 下 水 道 津波により松島行政区の沿岸部、国道45号沿いの地域で浸水したが、3月16日で排水完了。現在、下水道施設は汚水系及び雨水系とも応急復旧等により運転中。

(4) 電 話 町内全域で停止したが3月20日に固定電話が復旧。

東日本大震災を検証する②



交通

- (1) 鉄道 東北本線、仙石線ともに運行停止となり、3月31日から4月4日まで松島駅・岩切駅前間の臨時バスを運行。
4月5日に東北本線（仙台駅・松島駅間）が運行再開となったが、4月7日の余震により再び運行停止となり、4月12日から4月20日までの期間仙台ルート（松島駅・仙台間）、塩釜ルート（松島駅・塩釜駅間）の臨時バスを運行。
4月21日に東北本線（仙台駅・一ノ関駅間）が運行再開。
5月28日に仙石線（東塩釜駅・高城町駅間）が運行再開。
- (2) 町民バス 路線道路の損傷により運行を見合わせていたが、4月1日より運行開始（日曜・祝日は運休）。6月1日より日曜祝日も通常運行。

損壊家屋等 解体業務等

受付件数（6月13日～10月14日）

612件

内訳：住宅299件、その他313件

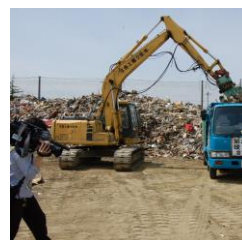
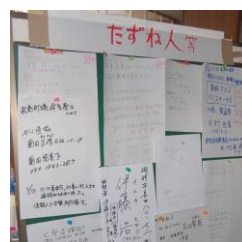
その他

- (1) ごみ処理 3月15日より災害ごみの巡回収集を開始。随時搬入を可能とするため、町民グラウンドをストックヤードとした。6月1日からは仮置き場を町民グラウンドから北小泉地区内（木材は幡谷地区内）に移し受け入れを行っている。生活系ごみ・し尿くみ取りは通常通り収集。
- (2) 仮設住宅 民間賃貸アパート等の借上げにより対応。入居世帯：57世帯。
- (3) 相談孫口 松島町被害者生活再建支援窓口の開設。
日程：3月26日より 10時～15時 役場3階大会議室
証明発行の相談・申請件数：り災証明 3,357件（取り下げ及び重複申請含む）
被災証明 1,508件
高速道路無料開放用（6/21～11/30）2,945件
- 仮設住宅入居相談： 96件
建物解体・被害調査等相談： 388件
応急修理制度相談（4/18～）： 1,209件
生活支援関係相談（4/18～）： 659件
一部損壊修理相談（9/1～）： 59件
復興支援定住促進事業補助金（7/1～）： 26件
商工業災害再建資金貸付（8/9～）： 19件
弁護士・司法書士無料法律相談会（4/1～6/28）： 58件
被災者支援の為の特別総合行政相談所（4/27）： 90件
被災者支援弁護士無料法律相談会（4/29）： 8件
住宅金融支援機構 住宅再建・補修融資制度相談（6/1～7/29）： 20件
- (4) 団体・個人からの協力
給水・技術・保健医療等の人的支援： 47団体
物資提供： 205団体、個人58人
寄附金： 148件 84,336,476円
義援金：町民生活支援義援金 190件 44,065,146円
義援金受付団体義援金（日赤他） 833,600,000円
県災害対策本部受付義援金 121,150,000円

証言①～安否確認と避難

松島行政区検証会議より

松島行政区検証会議では、行政区長の方々にお集まりいただき、東日本大震災への対応を検証していただきました。以下は、その要約です。



安否確認では、携帯電話が使えずに混乱したこと、徒歩で高齢者宅を歩き回ったことなどを振り返りました。

行政区	家族内	区内（高齢者宅等）
松島	携帯のメールは使えたが、電話はつながらなかった。	高齢者宅を確かめ避難させ、地区内で声かけをした。家族で逃げることで精一杯。
高城	携帯のメールは使えたが、電話はつながらなかった。	歩いて地区内の高齢者宅の確認をした。
本郷	発災直後は携帯のメールが使えたが、その後使えなくなった。携帯電話も同様だった。	歩いて地区内の高齢者宅の確認をしたが、プライバシーの問題から躊躇した。
	家族と確認できるまで3日かかった。	自転車での確認や徒歩による独り暮らし宅の確認、避難所での確認をした。
手樽	発災直後は携帯電話により連絡できた。災害伝言ダイヤルを利用した。	一軒ずつ確認した。高齢者宅が防潮堤から越波しそうだった。
北小泉 下竹谷	発災直後は携帯が使えたが、その後使えなくなった。	徒歩、自転車により確認し、希望者には避難所へ行くよう指示した。
上竹谷	発災直後は携帯が使えたが、その後使えなくなった。	一人暮らし宅を歩いて回り、声かけをした。危険箇所の確認をした。
幡谷	携帯電話を何度もかけてつながった。災害伝言ダイヤルを使用した。	徒歩により地区内は概ね把握できた。
根廻	携帯電話がなかなかつながらなかった。	名簿をもとに徒歩で確認し、高齢者を迎えに行った。
初原	携帯電話がなかなかつながらなかった。	一人暮らし高齢者を回り、19人全員避難所で一晩過ごした。
桜渡戸	携帯メールで確認がとれた。	高齢者宅2軒を歩いて回った。

安否確認

避難に関しては、車の渋滞や避難者の誘導など課題点もみられました。

行政区	避難経路上の安全体制	避難誘導の速やかさ
松島	新富山までは大渋滞。4月7日の余震時に避難者が増えた。高齢者の避難には自家用車が必要である。	自主防災訓練が役立った。地区として誘導する余裕がなかった。
高城	高台の避難所が少ない。第一小学校は津波時には行けない。大渋滞により美遊への避難は大変だった。	自信あるアドバイスができなかった。勤労青少年ホームや松島高校を避難所にしたい。
本郷	学校避難所の開設まで時間がかかった。学校との連携を深めるべき。	本郷ふれあいセンターに避難者が押し寄せた。
磯崎	磯崎からの避難がさまざまだったことから、避難者数の集約に時間を要した。	4月7日の余震時の方が渋滞し避難が困難だった。避難所が満杯で入りきれなかった。
手樽	山に避難し降りることができない人がいた。防災マップを活用できた。	地区が広く、まとまった行動は難しい。
北小泉 下竹谷	吉田川沿いで通行止めになった。	津波からの避難はなく慌てる必要はなかった。
上竹谷	吉田川沿いで通行止めになった。	津波からの避難はなく慌てる必要はなかった。
幡谷	五小へ避難。	津波からの避難はなく慌てる必要はなかった。
根廻	とくに危険な箇所は見られなかった。	すばやい行動ができた。
初原	徒歩避難が多く車の渋滞はなかった。	津波からの避難はなく慌てる必要はなかった。
桜渡戸	班長同士の連携が重要と思った。川の氾濫や堤決壊が不安であった。	各班連携できた。

避難方法、体制

証言②～救出救護と情報

救護救出では、とくに救出救護が必要なケースがなかった行政区もありました。また、地区によっては酸素吸入が必要な方を病院に連れていくこともありました。ただし、情報不足のため、病人が出た場合にどう対処すればよいかわからない、という声も聞かれました。

救出救護

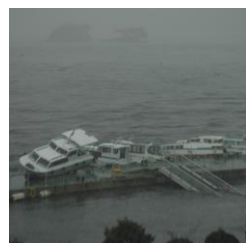
行政区	救出救護ができたか
松島	ホテル新富に医療チームがおり、安心だった。酸素が必要な4人を病院に連れていった。
高城	救出、救護が必要な方はいなかった。車に乗せて連れて行こうとしたが断られた。一人暮らしの方のプライバシーやルールの整理が必要。
本郷	とくに救出、救護が必要な方はいなかった。
磯崎	情報がなかったこともあり、もし病人がでた場合、どうすればいいか分からなかった。
手樽	酸素吸入の器具が必要な人がいた。
北小泉 下竹谷	とくに救出、救護が必要な方はいなかった。
上竹谷	上竹谷生活センターには発電機があることもあり、酸素吸入機が必要な方を連れてきた。
幡谷	けが人の報告はなかった。
根廻	けが人の報告はなかった。
初原	けが人の報告はなかった。
桜渡戸	けが人の報告はなかった。

情報収集と伝達手段では、防災無線やMCA移動無線に関する機能面への不満が多く聞かれました。

防災行政無線については、アナウンスだけでなくサイレンを流すことが提案されました。また、掲示板を活用した情報伝達が提案されましたが、行政区によっては効果がないという声も聞かれました。

情報収集と伝達手段

行政区	情報の集約	情報のまとめ・その他
松島	4月7日は夜で確認はできた。3月11日は昼であり、難しい面があった。当日夜まで中学生と連絡がとれなかった。	訓練のように上手いかなかった。浸水により広報、回覧ができなかった。防災行政無線が届いた地区と届かない地区があった。
高城	情報が伝わらず、どう動いてよいか分からなかった。	掲示板の活用も一つの手段。ゆっくりで緊張感の伝わらない防災行政無線のアナウンスよりサイレン等の方が良いのではないかと。
本郷	給水情報が欲しかった。新小梨屋地区は防災行政無線が聞こえない。	防災無線でサイレンを流してはどうか。各区長に衛星携帯電話を持たせてほしい。
磯崎	情報が伝わらず、どう動いてよいか分からなかった。	掲示板の活用も一つの手段。緊急防災メール等の活用。停電時にも防災行政無線が活用できるようにすべき。
手樽	情報が伝わらず、どう動いてよいか分からなかった。	行政地区内での情報のまとめはできた。行政区内での集約方法が課題。
北小泉 下竹谷	MCA 移動無線が繋がらなかった。停電時でも防災行政無線が長い時間使用できるようにすべき。	防災行政無線が鳴瀬の方からも聞こえ、混線していた。地区的に防災行政無線の数を増やすべき。
上竹谷	防災行政無線からの情報は得にくかった。MCA 移動無線は日頃の訓練で有効に使えた。	今後の情報伝達のあり方を町はどうすべきか。
幡谷	MCA 移動無線が使えなかった。区長に情報が伝わる体制整備が必要。災害メール配信、衛星携帯電話等が必要。	五小避難所で役場職員から情報を聞いた。役場からのニュース量が足りない。防災無線でサイレンを流してみてもどうか。掲示板の活用は本地区では一軒一軒離れているため効果的ではない。
根廻	ほぼ正確に情報を集約することができた。	介護が必要な人等を民生員に伝えておく必要性を感じた。
初原	ほぼ正確に情報を集約することができた。	情報伝達とガソリンは重要である。
桜渡戸	ほぼ正確に情報を集約することができた。	隣近所が遠いので、情報収集も大変である。



証言③～食料や水、燃料

食料と水については被災者同士で食料を持ち寄るなど、地域の人々の協力がみられました。給水車による迅速な給水活動の重要さも痛感されました。一方で、井戸水や沢水を利用したケースもあり、とりわけ井戸の存在が多くの人々を助けました。

食料と水

行政区	発災直後からの食料、水の確保	給水活動や支援物資の配布活動
松島	備蓄のある方は避難せず、数日間自宅でのいだ。小石浜地区では沢水から雑排水を汲んで使用した。瑞巖寺の井戸水を使用できた。	支援物資をどのように配布すべきか、配布方法を考える必要がある。
高城	給水情報が伝わらず、避難所によってはパニックになった。給水ポイントを増やしたことは良かった。	一人暮らしの人は給水車が来ても取りに来られないため、地区で給水活動を行った。支援物資が渡らない人もいたため配布方法を考える必要がある。
本郷	発災直後は地区内住民が持ち寄って食べたが、他から来た人の分まではなかった。	備蓄食料は、全住民の1日分は最低必要である。各個人が最低3日分の食料を確保することを徹底すべき。白米の備蓄も必要。
磯崎	避難者の数に対して炊具が足りなかった。	給水車の到着が遅い。
手樽	炊き出しは3日目から始まった。それぞれの家から持ち寄って食べた。	給水車の到着が遅い。
北小泉 下竹谷	玄米は多くあったが、白米は足りない。電気が使えない。	東松島からの避難者に配給した。井戸水の活用を地区として考えるべき。
上竹谷	食料は各家庭が持ち寄った。1人暮らしの方へ水を配って歩いた。	井戸水を使用した。給水車が来た際、給水途中で次の所に行ったりして混乱した。
幡谷	役場の給水車4台、中山クリニック1台、残り3台、その後6台になって落ち着いた。生活用水は井戸水で対応した。	井戸水の場所を知っていたことが幸いした。
根廻	ガス釜、ガスレンジなど各家庭から持参し対応した。	-
初原	JAから調達した米30kgは、避難所が解散するまで炊き出しとして使った。	給水タンクの配備、ガソリン等も備蓄する場所を確保すべき。
桜渡戸	農家が多く米などは集まった。各家庭から食料品を持ち寄った。	町で地区代表として区長などに渡してもらいたい。水道事業所の後地は水源であり桜渡戸の井戸が使えるので活用すべき。発電機が必要。

燃料については、ガソリンなどの確保に苦労しました。そんななか農家では農機具用の燃料を備蓄している方も多く、これらの持ち寄りが大変役に立ちました。また、ガソリンスタンドの活用の仕方に関する要望が多く寄せられました。

燃料

行政区	組織内での確保	その他
松島	ガソリンを行政員に配布するよう配慮すべき。	浸水のため自家用車が使えなかった。
高城	区長、行政員は皆のために自家用車を使用するため優先してガソリンを入れるべき。	ガソリンが心配で、区としての仕事に支障がでた。
本郷	ある程度できた。	住民から給油情報を求められた。発電機のガソリン足りなかった。
磯崎	灯油は区で調達した。	確保に苦労した。
手樽	備蓄している家庭から分けてもらって対応した。	確保に苦労した。
北小泉 下竹谷	燃料は、農家の農機具用として、まとめて備蓄している方も多く、協力しあいながら使用した。	ガソリンスタンドの協力のもと、区が対処したことで困難をしのいだ。
上竹谷	農家が多いため、被災初期は農機具から抜いて持ち寄ったが、長くはもたなかった。	ガソリンスタンドを有効に利用すべき。
幡谷	農機具から調達したり、各家々に保管していたものを持ち寄った。区民が協力的に動いた。	役場でガソリンスタンドを確保して燃料を補うべき。農家では灯油や軽油を確保しているがガソリンは確保していない。
根廻	農家の備蓄分を使用して発電機対応とした。車用は各自が調達した。	エコキュートの世帯は最後まで避難所に残っていた。
初原	ガソリンは反町自衛隊との連携を考えるべき。	避難所にはソーラー発電機が必要である。
桜渡戸	家庭用のガス炊飯器を借用して炊き出しを行った。	-

証言④～避難所、防災訓練

避難所の運営は、多くの方々の協力で行いましたが、情報収集や伝達に関する課題のほか、行政区によっては集会所の利用も提案されました。

避難所運営

行政区	統率のとれた運営	情報収集・その他
松島	避難所の運営はなかった。	一人暮らしの在宅高齢者宅の見回りで精一杯。
高城	避難所の運営はなかった。	－
本郷	ある程度はできたが理想とまではいかない。指定避難所に発電機1台、行灯等の灯りは絶対的に必要である。	－
磯崎	現場で協力できる態勢に役場も協力すべき。	MCA無線が使用できなかった。備蓄品等も備えた避難所の整備をすべき。
手樽	役割分担を決めて運営した。リーダーは決めておくべき。ルールや決断等を含め、スタートが大切。物資が届くと運営が楽になった。体育館より教室が運営しやすい。	自主防災で水を蓄えていた。反射ストーブや発泡スチロールは有効。敷物は必要。
北小泉 下竹谷	避難所生活が長びくときは高齢者用に椅子を用意すべき。長期的な避難は、東部地域交流センターを中心とすべき。下竹谷地区では個人宅にまとまって避難したケースが多く、北小泉地区では滝ノ沢サブセンターを利用。	不必要な物資も多く届いたため、町と区で何が必要なのか等の連絡をすべき。AEDは「いざ」使う場面では萎縮してしまうのではないかと。日頃の訓練の必要性を感じた。
上竹谷	区長を中心として運営ができた。	ほかの避難所や役場等の情報がほしかった。
幡谷	先生方には炊き出しを手伝っていただいた。防火訓練で顔見知りであるため、トラブルはなかった。	－
根廻	統率した運営はできた。役場情報が入れば運営に携わる人の気持ちや意識の持ち方が楽になる。住民の緊張感が保てるよう迅速で率先した行動が必要である。	役場からの情報は役立った。酸素吸入器が必要な人がいた。避難拠点を整備すべき。松中講堂跡地を備蓄倉庫の候補にあげた。根廻では近くの集会所を利用すべき。
初原	リーダーはなく避難者全員で対処した。炊き出しも全員で行った。わざわざ避難所に集まれと言えなかった。	酸素吸入器が必要な人や石巻からの避難者がいた。食料は苦労しなかった。井戸水は重要である。
桜渡戸	区長をリーダーとして手すきの人に集まってもらった。	発電機が必要。寝たきりの方の情報を把握すべき。安否確認をどうするか。民生員の情報提供は可能か。

防災訓練については、多くの行政区で地域のコミュニケーション作りに役立っていたことが判りました。今後の防災訓練についてもさまざまなお意見が寄せられました。

防災訓練内容

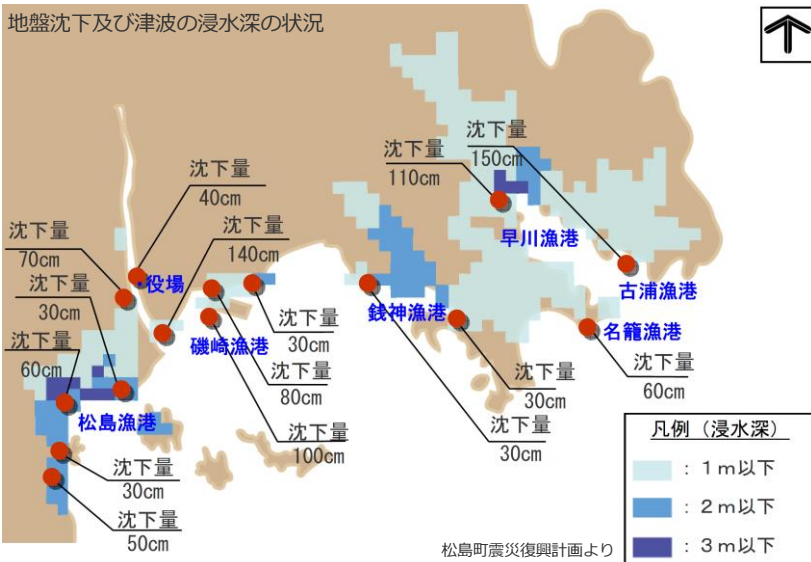
行政区	普段の訓練	今後の訓練
松島	訓練を通して、地区住民の連携（コミュニケーション）づくりに有効であった。	地震以外（台風、土砂災害）を含めた訓練も実施したい。訓練のあり方をもう一度検討すべき。
高城	現実的には判断できない。	情報伝達訓練が必要。無理をして避難するよりも、地区によっては、2階家では2階に避難することも一法である。
本郷	有効な部分もそうでない部分もあるが、訓練を通して地域のコミュニケーション作りはできていた。	自助、共助、公助（自分のことは自分でやる）を、町でもPRすべき。自主防災でも促していきたい。
磯崎	有効な部分もそうでない部分もあるが、訓練を通して地域のコミュニケーション作りはできていた。	防災組織の要員のマニュアル化が必要。
手樽	有効な部分もそうでない部分もあるが、訓練を通して地域のコミュニケーション作りはできていた。	地震の心得の看板の設置を考えたい。青年部の役割や役割分担の決め方を検討すべき。地区避難所以外でも支援物資は必要。井戸水、沢水は生活水として使える。今後の訓練内容にそのような事柄も含めていきたい。
北小泉 下竹谷	訓練を通して、必要な物等確認すべき。	訓練を通して地区民相互のコミュニケーションを深めるべき。
上竹谷	コミュニケーションを深める意味でも有効だった。	組織として、役場に頼らないことを想定した訓練が必要。今後とも互いの協力体制が必要。
幡谷	震災の検証等を今後実施すべき。	訓練の在り方をもう一度検討すべき。
根廻	大変有効だった。避難訓練の延長という意識で行動できた。	自主防災訓練に関心を持つようになった。根廻は自主防災の結束力も強い半面、隣接地区との連携には課題が残る。自主防災への補助が必要。区長会と分館長会との連携が必要。
初原	有効な部分もそうでない部分もあるが、訓練を通して地域のコミュニケーション作りはできていた。	情報伝達手段の訓練が必要。慌てて運転する人が多いので、住宅の入り口にカーブミラーを設置すべき。
桜渡戸	給水の訓練も必要。	各地域ごとに実施すべき

証言⑤～その他

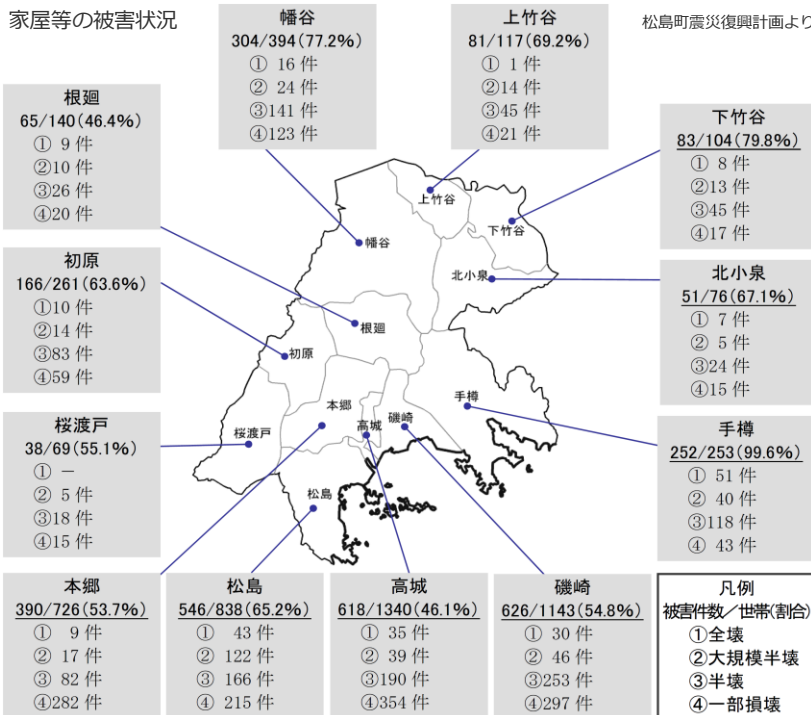
その他、多くのご意見が寄せられています。役場としても、給水タンクを購入するなど確実な防災に向けて動き始めています。また、皆さまのご意見を今後の防災に生かすべく努力していきます。

行政区	その他	役場から
松島	<ul style="list-style-type: none"> ◆個別受信機の各家庭・高齢者宅への設置を望む。 ◆高台に備蓄倉庫が必要。 ◆防災行政無線の時報を短くすべき。 ◆個人の教育が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆来年3月を目途に全行政区で何が起きてどうだったのかという記録を発行する。 ◆本日の検証記録をもとに復興計画に盛り込んでいきたい。
高城	<ul style="list-style-type: none"> ◆高齢者が多く高台も少ないため、避難ビル等の建設はできないか。 ◆高城地区はお寺を避難所として使用することが多い。 ◆指定避難所の確立とアクセスルートを考えるべき。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆区長等が鍵を持てるよう教育委員会と協議したい。 ◆住民、観光客（議員、区長、職員を含めた）メールでの一斉配信を実施していきたい。 ◆給水タンクを購入し、区など独自でも給水できるシステムを作った。 ◆衛星携帯電話を今後考えていきたい。
本郷	<ul style="list-style-type: none"> ◆本郷地区の北と南では津波に対する考え方に温度差がある。 ◆情報発信は口頭と印刷物が有効。ゴミ集積所に掲示板の設置が必要。 	
磯崎	<ul style="list-style-type: none"> ◆白萩会館の前の道路を拡張すべき。 ◆防災会議のメンバーに住民は入れないのか。 ◆情報発信の手段として、掲示板を活用すべき。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆300リットルの給水タンク及びガソリンスタンドでも使用できる発電機を整備する。 ◆町内数力所に拠点となる備蓄倉庫を考えていきたい。
手樽	<ul style="list-style-type: none"> ◆震災が夏だったら、臭いや害虫等対策が必要。 ◆手樽交流センターでは発電機が2台は必要。 ◆発電機に付属する投光機やコードが必要。 ◆山側の地区は農家が多いためディーゼル用エンジンタイプ、海側は漁師が多いのでガソリン用エンジンタイプが良い。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆地震直後、給水車が足りなくなった理由の一つとして、人工透析用に一台を確保せざるをえなかった。 ◆来年3月11日に震災の小冊子を発行していきたい。
北小泉 下竹谷	<ul style="list-style-type: none"> ◆避難所にガス釜、コンロが必要。 ◆道路の復旧はいつ頃からか。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆MCA 移動無線については、普段からつながる所をチェックし役場と通信の訓練をしてほしい。 ◆避難所に個別受信機を設置するので防災行政無線が聞こえにくい時は、避難所に行くように。 ◆給水タンクを購入した。軽トラックにも積めるので、給水車が来ない時には、地区の方にトラックを出して直接二子屋浄水場へ給水に行っていたいただいても可能とした。
上竹谷	<ul style="list-style-type: none"> ◆第五小学校体育館の避難所は、夜間や祭日等教職員が不在時に誰が開けるのか。 ◆米について「あぐり」と協定はできないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆鍵の管理は教育委員会との協議となるが、地元の区長が持っていることが必要である。 ◆「あぐり」との協定はできる。 ◆大型発電機を購入し今年度中には納入される。これはガソリンスタンドでも使用でき、燃料供給に役立てる。
幡谷	<ul style="list-style-type: none"> ◆夜間や休日等の避難所施設の鍵を区に渡すべき。 ◆幡谷行政区だけの炊き出しと思っていたら松島全部の炊き出しと後から知った。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆地域に拠点となる備蓄倉庫を用意する考えがある。学校を拠点した大きな倉庫が必要であることは他の行政区からも話がでている。 ◆3月に取りまとめた震災の小冊子を配布したい。
根廻	<ul style="list-style-type: none"> ◆避難所では介護やパーテーションなども必要。 ◆行政区長はガソリンの支給をすべき。 ◆今後、防災機能を含めた機能を備えた役場庁舎を東京エレクトロン跡地を活用して整備しては。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆避難所の拠点づくりをしていきたい。根廻、本郷地区は松中旧体育館跡地を備蓄倉庫として考えたい。
初原	<ul style="list-style-type: none"> ◆避難所にソーラーシステムや発電機の装備が必要。 ◆情報伝達訓練を行うべき。 ◆災害時、焦って運転をする人が多いので、上初原住宅の入口にカーブミラーが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆検証で得たことは、まとめて他の地区にも周知するとともに、復興計画にも盛り込んでいきたい。
桜渡戸	<ul style="list-style-type: none"> ◆震災前に隣近所が遠いので、各戸の把握をするのが大変であることから、班ごとに臨時避難所を作った。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆桜渡戸行政区には、指定避難所が現在無い状況であることから、この分館施設を拠点として捉えられるよう考えていきたい。 ◆急いでやれるもの、情報伝達、給水、発電、燃料 既に対応を始めている。

地盤沈下及び津波の浸水深の状況



家屋等の被害状況



《声》

家族と確認ができるまで3日かかった。携帯電話はつながらなかった。家族で逃げることで精一杯だった。避難所が満杯となったため沿岸付近の本当に避難しなればならない方が入りきれなかった。第一小学校を避難所と考えられると、川を渡らないと到着できないので津波の時は行けない。情報が伝わらないことで、どう動いてよいか分からなかった。山に登って降りることが出来なくなった人がいた。給水情報が伝わらず、避難所によってはパニックになった。大渋滞でたどり着くことが大変だった。近場での避難場所の設置を望む。地区内住民、持ち寄って食べたが、他から来た人の分まではなかった。介護が必要な人等を民生員に伝えておく必要性を感じた。支援物資が渡らない人もいた。酸素吸入器が必要な人がいた。学校を避難所として使用させていただく地区であるが、開設されるまで時間がかかった。高齢者等自家用車が無いと避難ができない。勤労青少年ホームや松島高校を避難所として使用出来れば、もっと速やかな避難もできたと思う。水には大変苦労した。生活用水は井戸水で対応した。燃料は農家が多く、農機具用として、まとめて蓄えていた方も多く、協力しあいながら使用した。農家では灯油、軽油を確保している。ガソリンは確保していない。防災行政無線、停電時においても活用できるよう対処してほしい。情報収集は訓練のように上手くはいかなかった。役場からのニュースの数量が足りなかった。



松島町役場
〒981-0215 宮城県宮城郡松島町高城字町 10 番地
電話：(022) 354-5701
<http://www.town.matsushima.miyagi.jp/>
E-mail: info@town.matsushima.miyagi.jp

肩寄せあって、手を取りあって、
美しい松島の再生と貢献できる
新しい防災まちづくりをめざして